

田辺朔郎の生き様と業績は、献身的な仕事と祖国への奉仕が目立つ明治期の指導的な土木技術者の中でも際立っているといえる。田辺は創立後まもない時期の工部大学校で学ぶ。この大学は日本の発展のためには近代科学技術の導入が不可欠であるとして、伊藤博文工部大臣が山尾庸三工部次官らと明治六年に東京虎ノ門に創立したもので、これは後に帝国大学工科大学へ、さらに現在の東京大学工学部につながってゆく。山尾庸三は我が国の科学技術の育ての親とも言うべき人であり、明治十二年二八七九）創立の日本工学会（のちにこれから分かれて機械学会、建築学会、電気学会、土木学会などができる）の初代会長である。工業のない日本に何故工学教育が必要であるか、と問われたのに対して山尾は次のように答えたと伝えられている。「工業なくも人をつくらば、その人工業を見い出すべし」と。

この大学では教授はすべてイギリス人であり、教育は英語によるものであった。入学後六年目の卒業論文の対象として田辺が選んだのが琵琶湖疏水の計画であった。京都までの鉄道

の全通しない時代であったが、京都まで出かけ現地調査をした田辺はその成果を英文論文と何葉かの図面として仕上げた。

北垣京都府知事にその研究成果を説明する機会を得た田辺は校長に推薦されて就職先として疏水事業を選び、これに従事するため明治十六年卒業と同時に京都へ赴任する。北垣知事はこの弱冠二十一歳の工学士を琵琶湖疏水建設という我が国では最大規模の土木事業の主任技師の任に当たらせる。

田辺の卒業研究に関して、今一つよく知られた話がある。京都での調査に際して地質調査の折、誤って右手を怪我した田辺は卒業論文の執筆に際して右手を使うことができなかつた。卒業が遅れることをおそれた田辺は左手で論文執筆と製図をやり遂げたのであつた。不撓不屈の強い意志を持った田辺朔郎を示すエピソードとして伝えられている。田辺朔郎の卒業論文執筆にかけた情熱と、大事業の実現へつながつていつた優れた成果を記念して、今も東京大学工学部土木学科では優れた卒業論文を仕上げた学生に毎年、田辺朔郎賞を授与している。北垣知事の信頼に感激した青年技師の疏水建設における八面六臂の活躍は本書に詳しく描かれている。琵琶湖疏水事業における田辺の業績の中で特筆すべきは、その工事途中で水力発電の導入に踏み切つたことである。明治二十一年アメリカを視察し、始まつたばかりの水力発電をまの当たりにした田辺はその発展性に着目し、疏水の落差を利用してまだ他の先進諸国においても実現したこと殆どなかつた水力発電を採用することとした。これにより工

場の動力や市電の早期実現がなされたことのほか、西川幸治京大名誉教授の述べるように、当初は水車の利用を前提として東山山麓に計画されていた工場群の立地がなくなることになる。もしこの地区が工場地区化されていたなら現在の京都の都市景観は実に惨めなものになっていたに違いない。田辺朔郎の先見がこの点でも現代の京都に大きな影響をもっているのである。

明治二十三年に琵琶湖疏水の大工事は完成し、田辺はその後もなく京都での職を辞し、帝国大学（のちに東京帝国大学）土木工学科の教授となつて東京へ戻る。

しかし、田辺は数年にして帝大教授という安定した職を擲つて、再び現場での建設事業に従事する。北海道開拓使へ転じた北垣国道の求めに応じて、北海道を貫通する鉄道建設のため人跡稀な北海道内陸部へ入り、路線選定のための踏査を自ら行い、設計を指導し、工事を監督するのである。田辺朔郎の業績が特に評価されるのは疏水建設だけでなく、この北海道の鉄道をはじめとして、その後も長い年月にわたつて献身的に実に多くの建設事業を成し遂げてゆくからである。

北海道での鉄道建設の後、田辺は京都帝国大学教授に迎えられ、再び京都に戻る。京都では京都帝大工科大学長など学内での要職を務めると共に、京都の三大事業である第二疏水を建設しての利水事業、急速濾過式浄水場を設けての水道事業、市内電車事業を提案し、その実現に尽力する。このほか全国各地での利水事業、鉄道建設、運河建設などを指導し、関門

海底トンネルのフイージビリテイスタディーを進め、その建設を提言する。

また六十七歳で第十七代土木学会会長を務め、また『明治以前日本土木史』の編纂委員長として、極めて貴重な国土建設史であるこの書を完成させる。そのほか『とんねる』『水力』など数多くの著書を残す。田辺朔郎の業績についての調査にも力を注いだ京大名誉教授天野光三は、その広範で多彩な仕事と能力を次のように評している。

「欧米の学者も驚嘆した彼の才能はもちろん、広い視野と先見性、緻密な計画力とこれらを支える強靱な精神力、私心のない高潔な人柄が、幾多の困難を克服し、このような大事業を次々に完成させることができたのであろう。田辺朔郎の八十二年の生涯は、息つく暇もない大土木事業の連続であつた。しかもその東奔西走の合間に残された数多くの和歌、漢詩、写経、日本画、随筆などなど、多方面にわたる芸術的天分には、よくもこれほどただ感嘆の

ほかはない。」

一八九四年英国土木学会は田辺の業績を讃えて、テルフォードメダルを贈呈する。トーマス・テルフォードは英国内を始め各地に実に数多くの橋梁、運河、道路などを設計し建設した大土木技師である。英国土木学会初代会長を務め、その遺体は英国に対し最大級の貢献をした人々のみが眠るウエストミンスター寺院の中に葬られている。

田辺の授賞は、スコットランドのフォース橋の完成（二八九〇年）など、今日の英国の国

土の骨格を形作ったヴィクトリア王朝の大建設時代の最中であつた。田辺と同じく信じ難い

ほど多くの土木事業を手がけたトーマス・テルフォードの名を冠したメダルは、まことに最適の人物に与えられたと言える。

田辺朔郎はこのように想像を絶する多くの仕事に打ち込んだ、まさに行動派の学者であった。「成し遂げぬことあまた残れるは、今年も去年に似たる暮れかな」の自作の歌もさぞかしと思われる。

昭和五十七年京都蹴上のインクラインの上の疏水公園に青年技師田辺朔郎の銅像が建てられる。平成元年には疏水開通一〇〇年を記念して疏水記念館が開館されて、疏水に関する資料が保管、展示され、また北垣国道知事の銅像もここに再建されることになる。